

山形美術館蔵新海竹太郎作「聖観音像」の制作背景について

長坂 一郎

はじめに

山形美術館の新海竹太郎作「聖観音像」は新海竹太郎記念室に展示されている一連の作品の中ではその表現が緻密な点で異色といつてよいであろう。そこには特殊な制作事情があったことを想像させる。この度その像の底面の刻銘を見つけ、その制作事情についての新事実が指摘できるとともに制作背景について考えることがあったので報告したい。

1 法量、材質、形状、銘文について

像は総高35・8 cm、像高30・3 cm、髮際高26・5 cm（註1）の銅像で、台座を含んですべて一鑄の像である。（図1〜5）

髪は大きな単髻で毛筋彫りとし、四面に頭飾をつける。正面の頭飾は先を丸めて曲げた花卉九枚を山形にし中央に化仏（如来坐像）を置く。左方は同じく先を丸めて曲げた花卉九枚を山形にし根元に小さな円形の花を置き、右方は先を丸めて曲げた五弁花形の根元に小さな円形の花、背面も同じく五弁花形の根元に円形の花とする。天冠台は紐二条とし、頭飾およびその間の花飾りから連珠一条の飾り紐をつける。髪際は正面で左右に振り分け毛筋彫りとする。太めの鬢髪一条耳を渡る。白毫相。耳朶は貫通して別製の輪をつける。三道を表わす。垂髪二条肩に垂らす。胸飾をつける。胸飾は二重の連珠文帯（上側に大きな連珠文帯、下側に五個のやや大きめの珠をつけた連珠文帯とする）で、下側の五個のやや大きめの珠からは副帯を垂らす。条帛をつけず代わりに三重の連珠文



図1 山形美術館・銅像聖観音立像正面



図2 山形美術館・銅像聖観音立像右斜面



図3 山形美術館・銅像聖観音立像右側面



図6 山形美術館・銅造聖観音立像背面裙裾



図5 山形美術館・銅像聖観音立像左側面



図4 山形美術館・銅像聖観音立像背面

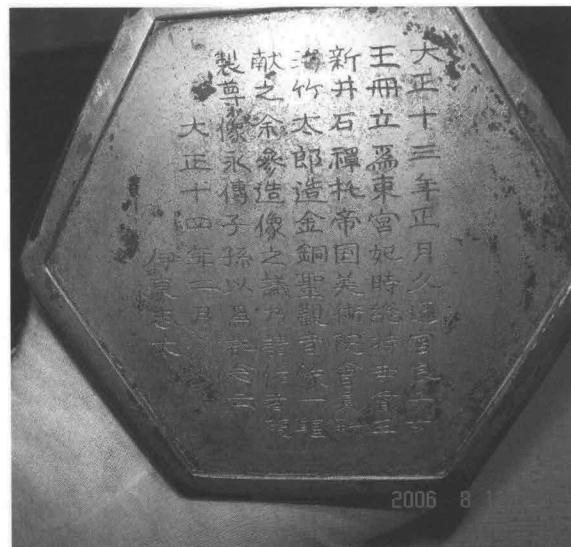


図7 山形美術館・銅造聖観音立像台座底面

帯からなる飾りをつける。天衣をつける。裾（折り返しつき）をつける。裾は右前で合わせる。裾は腰帯で締める。腰帯の正面および左右、背面に花飾りをつけ、そこから連珠帯の環珞を垂らす。正面の環珞は八重で中央の二連は両脚間に垂下し、その外側のものは各一連ずつ左右に広がり、側面の花飾りに大体は繋がる（繋がないものもある）。背面の環珞は二重で垂下し、先に環と布飾りをつける。臂釧、腕釧、足釧をつける。左手は屈臂して掌を正面に向けて上げ、五指をまるめて蓮華（花弁一枚が開く未開敷蓮華）を持つ。右手はやや屈臂して体側に垂下し、第一、二指をまるめ、他は伸ばす。右足を前に出し腰をやや左に捻って立つ。

背面、裾の裾部に「新海竹太郎作」と刻銘がある（図6）。持物の蓮華、耳飾は別製。また現状左手第二指が折れている。

下半身の長いすらりとした体形で体軀の肉付けは穏やかである。面相はやや下膨れの面長な顔に大きな目鼻立ちをくつきりと刻み、意志的な表情を示す。胸飾、条帛様環珞、環珞は細かく表現され、衣文線も丁寧に表現されている。総じて古典彫刻を元にした穏やかな作風の中にも細部にまで神経の行き届いた佳品といえよう。

台座底面に次のような刻銘があった（註②）。「大正十三年正月久邇宮良子女／王冊立為東宮妃時総持寺貫主／新井石禅托帝国美術院会員新／海竹太郎造金銅聖観音像一軀／献之余参造像之議乃請作者復／製尊像永伝子孫以為記念云／大正十四年二月／伊東忠太」（図7）。それによると山形美術館聖観音像は大正十三年（一九二四）正月に久邇宮良子（後の昭和天皇皇后）が東宮（後の昭和天皇）の妃に冊

立された記念として献上しようとする総持寺貫主新井石禅が新海竹太郎の制作を頼んだもので、その制作の会議に参加した伊東忠太が記念として子孫に残そうと作者の新海竹太郎に頼んで翌大正十四年（一九二五）四月に複製を作らせてもらったものだという。これよりの制作年代および制作の由来が明らかになつた。

2 総持寺大観音菩薩像と猷納観音像

ところで実は山形美術館像には原形といえる像が存在した。かつて総持寺に建立された「大観音菩薩銅造」（図8）である。体形、容貌、姿勢、裝飾品など一見してそれらが酷似することは認められよう。異なるところは頭飾の花弁の数や胸飾の上下の間隔、条帛様瓔珞の幅くらいであろうか。ただしこの二像を比べると、大観音像の方が頭飾の花弁の数が多くまた下側胸飾の副帯が長いな

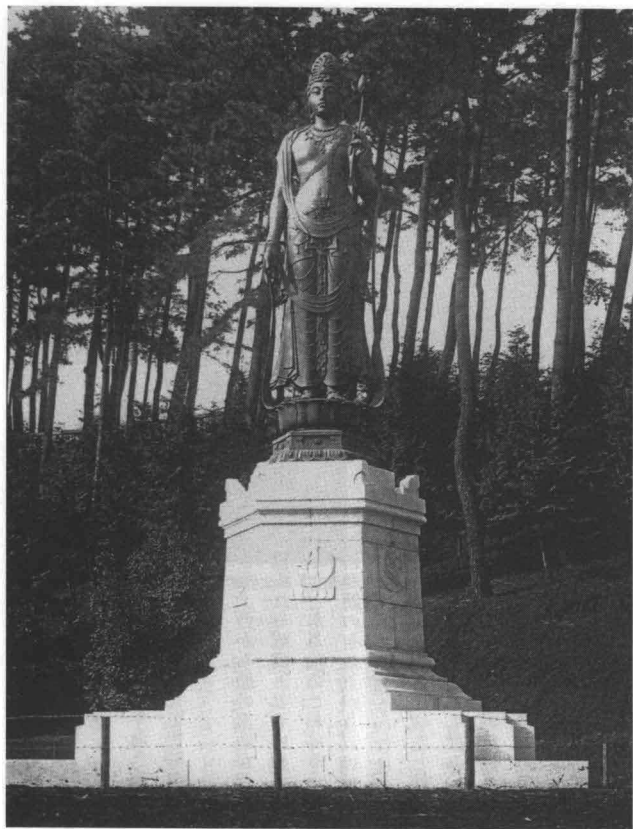


図8 総持寺・大観音菩薩銅像

ど大観音像をやや簡略にしたものが山形美術館像であるといえるであろう。

この大観音像についてはまず昭和十八年（一九四三）四月四日付の「大観音菩薩銅造調査二関スル回答之件」（註3）に、「物件名 聖観音菩薩銅像 材料 青銅／所在地 横浜市鶴見区鶴見町一二八番地 曹洞宗大本山総持寺境内竜王池畔観音円林／丈 三丈三尺（但台座トモ）／経費 拾五万円也（但観音園林土木費トモ）／竣工 大正十四年三月／铸造者 帝室技芸員 新海竹太郎／铸造顧問 伊藤忠太／本願 大本山総持寺貫主 石川素童／勸進 大本山総持寺監院 伊藤道海／铸造師 東京日暮里 阿部铸造所／開眼導師 大本山総持寺貫主 新井石禅／開眼供養日 大正十四年三月十五日」とあり、大正十四年（一九二五）三月十五日に開眼供養されたもので、作者は新海竹太郎、铸造顧問が伊東忠太、開眼導師新井石禅というものである。またその造立目的は先の回答書の後の部分で「一、建立当事ノ経緯（一）動機 明治天皇頌徳記念／皇恩ニ酬ヒ奉ルタメ」と、明治天皇の為に造立したという。

さらに造立経緯をくわしくみると、大正十二年（一九二三）三月発行の『禅の生活』三月号（註4）には大観音像発願の特集号として、「観音菩薩：総持寺貫主 新井石禅」、「観世音尊像造立に就いて：帝国大学教授工学博士 伊東忠太」、「大菩薩像製作の辛苦：帝室技芸員帝国美術院会員 新海竹太郎」、「铸造発願の動機：総持寺副監院 伊藤道海」の各文が掲載されている。そのうち伊藤道海は大観音像の制作動機について次のように述べている。

- ① 総持寺の鶴見移転の際の困窮時に明治天皇から下賜金が与えられ、それによって移転事業が達成された。
- ② 前貫主の石川素童は日ごろ明治天皇を崇拜しており、ついには総持寺の根本の信仰対象である観音菩薩と同一視するようになっていた。これが建立の動機だという。

ついで伊東忠太の文章によれば、

- ① 伊東は伊藤道海から「考案及建造の一切を委任」された、
 - ② 原型製作者として新海竹太郎を推薦した、
 - ③ 既存の像のままの模写、複製はしない、という。
- さらに新海竹太郎は

- ① 製作にあたっては現存する観音像の優秀作（薬師寺聖観音像、聖林寺十一面観音像、渡岸寺十一面観音像）を参考としなければならない、
 ② インドの仏像も閑却できない、という。

これらからまず造像の計画は前貫主石川素重の在世中、すなわち大正九年（一九二〇）以前に立てられたことがわかり、さらに作者の選定は伊東忠太によったこと、像の形態の決定には伊東忠太も関与していたらしいこと、具体的には薬師寺聖観音像、聖林寺十一面観音像、渡岸寺十一面観音像の各像を参考としたらしいことがわかる。

このうち伊東忠太が新海竹太郎を推薦したことについては、すでにこの二人は明治四十一年（一九〇八）の南部利祥像、大正五年（一九一六）の前島密像、大正九年（一九二〇）の有栖川威仁親王像、大正十年（一九二二）の平田東助像で共同作業（伊東忠太が台座設計）をおこなっており（註5）、同郷でもあり親しい関係であったからと想像される。また薬師寺聖観音像以下の参考像については甥の新海竹蔵によると（註6）、「大正十二年）初夏の頃から鶴見総持寺に建立すべき聖観音の製作に着手した。高さ十六尺、蓮台共十九尺で竹太郎作中第一の大作であった。この像制作につき奈良に遊んで聖林寺十一面観音、薬師寺聖観音等を研究した。それまでは聖林寺十一面観音を白眉としていたように思われるが、この度の研究によって薬師寺聖観音を最上に推すようの言葉を聞いた。此度の観音も多く範を薬師寺観音にとつたように思われる。像は木心にして漆喰土で被う方法で、七月末に至って大略の土附を終わつた。」とあり、寄稿文のとおりその夏に薬師寺聖観音、聖林寺十一面観音を研究したことが知られる。そして前記の如く大正十四年三月十五日に開眼供養がなされた。

一方、山形美術館像の原像の献納像に関しては大正十四年二月一日発行の『宗報』六七四号（註7）に記載がある。「献納ノ観音 東宮妃良子女王殿下御成婚記念ノタメ鶴見本山ヨリ同殿下ノ護り本尊トシテ献納スベキ観音ハカネテ帝室技芸委員新海竹太郎氏苦心謹製中ノトコロ愈々出来シタルヲ以ツテ、舊臘二十五日貫主殿下ハ副監院伊藤道海師ヲ随伴、久邇宮邸へ参向、親シク父宮殿下ニ献上シタルトコロ殊ノ外ノ御満足ニテ御嘉納相成リ、同宮家ヨリ直ニ妃殿下御贈呈ノ旨且ツ種々御丁寧ナルオ言葉ヲ賜リタル趣キ、本山ハ勿論全曹洞宗

ノ光栄ト謂フベシ」。これによると献納像は大正十三年十二月二十五日に献納されたという。つまり大観音像と献納像は同時期に制作されたことになる。また先にみたように大観音像制作の関係者は山形美術館銘文に登場する面々でもあった。つまり総持寺ゆかりの大小二体の観音像はその形態が酷似し、かつ制作にたずさわつた人間も同じということになる。山形美術館像の制作理由は久邇宮良子婚姻記念の献納であった。一方、大観音像の制作は明治天皇のためとあった。つまり総持寺ゆかりの大小の観音像は同じ形態であるのかかわらず造立目的は異なるということになる。逆にいうと新海竹太郎は目的が異なるのに同様な形態のものを制作したということになる。それはなぜであろうか。山形美術館像はなぜ大観音と酷似したものでよかつたのか。その説明が本稿の目的である。

3 山形美術館像の形式の検討

総持寺大観音像制作にあつて新海竹太郎が薬師寺聖観音像（図9）、聖林寺十一面観音像（図10）を研究したことを先に述べた。ここでは山形美術館像の形式を分析してそれがどの程度反映しているかを確認してみたい。

まず頭体のプロポーションは上半身を小さめに作り、下半身を長く作るプロポーションで体躯の肉付けは穏やかである。このプロポーションや肉付けは例えば十一世紀後半の後半の長勢作広隆寺日光、月光菩薩像や同じく十一世紀後半の六波羅蜜寺地藏菩薩像などのいわゆる定朝様の像に似ている。姿勢は正面を向いて直立しやや左足をひらく。左足の開きがやや大きいものの薬師寺聖観音像に類似する。左手を挙げ、右手を下げる形も薬師寺聖観音像と同じである。ついで細部をみてみる。まず面相部（図11）をみると顔の輪郭は異なるものの目、鼻、上唇の形は8世紀後半の聖林寺十一面観音像（図12）に似ている。殊に上下の臉とも波打つ目の形は聖林寺像の他は類例が見あたらない。頭飾の形も珍しい。正面と左右の三方に頭飾を配する三面頭飾は7世紀後半いわゆる白鳳時代の金銅仏に見受けられるものであるが、さらに背面の四面に頭飾をつけ

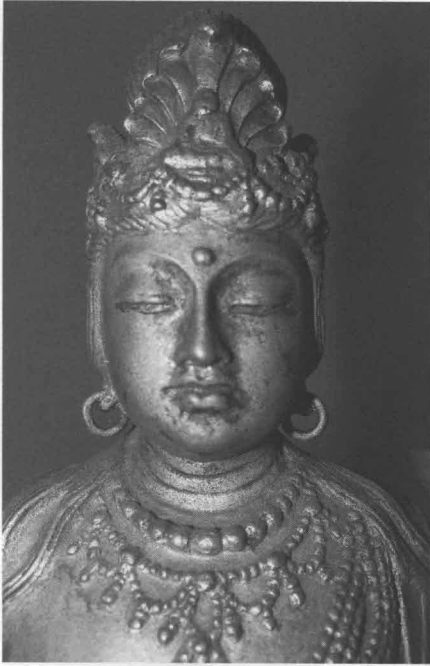


図11 山形美術館・聖観音立像面相部



図10 聖林寺・十一面観音像



図9 薬師寺東院堂聖観音像



図12 聖林寺・十一面観音像面相部

る例はない。おそらく創作したものであろう。頭飾は先端をねじって（コブラの頭のように）曲げた花弁を山形にした変わったものである。花弁を頭飾とするのは例えばインド・マトゥラーの仏像に見られるが（図13）日本では珍しい。また脇の頭飾の形は花弁が前方に曲がっているが（図14）、類型は7世紀後半の野中寺弥勒像（図15）や法隆寺献納宝物165号像に見られる。鬘髪が耳を渡る形はやはり7世紀後半の金銅仏や平安時代前期の仏像、例えば9世紀の神護寺五大虚空蔵菩薩像（図16）に見られる。さらに耳に飾りの輪をつけるものはこれが耳鏝だとすれば同じく9世紀の渡岸寺十一面観音像（図17）に見られる。胸飾は上下の二重のものであるがこの形は7世紀末〜8世紀初めの奈良時代前期に見られるもので例えば薬師寺聖観音像（図18）がそうである。上半身に斜めに条帛のように瓔珞（連珠帯）をかけるが、この形式は他には見あたらない。ただし長い瓔珞を斜めにかけるもの（「斜掛け」）はインドにあり日本では奈良時代前期の薬師寺金堂本尊脇侍像にみられる。また瓔珞の一端を正面のやや左で内側から外に出すがそのような条帛の端の処理は聖林寺十一面観音像（図10）に見られる。裾は両足首までの長さ、両裾を広げる形、折り返し正面の合わせ目を品字形とする形、両足の間の合わせ目の形、両膝下の衣文線の形式など薬師寺聖観音像に酷似する。また上下に渡る天衣の形式も薬師寺聖観音像に酷似するし、瓔珞の形式も薬師寺聖観音像に酷似する（図9）。

以上山形美術館像の形式を見てきたが、総体としてはやはり薬師寺聖観音像に従うところが多く、それに細部の形式に聖林寺十一面観音像、野中寺弥勒像、渡岸寺十一面観音像などの形式を取り入れて、さらに平安後期のプロポーシオンを採用し、それに独自の表情を表わしたものと違うことになろうか。ともかくも先にみた『禅の生活』の竹太郎の寄稿文および『新海竹太郎伝』の記述のとおり薬師寺聖観音像を基に造形したものであるのは間違いないであろう。



図15 野中寺・弥勒菩薩像



図14 山形美術館・聖観音立像頭飾



図13 菩薩頭部 マトゥラー出土
ニューデリー国立博物館



図18 薬師寺・東院堂聖観音胸飾



図16 神護寺・五大虚空蔵頭部

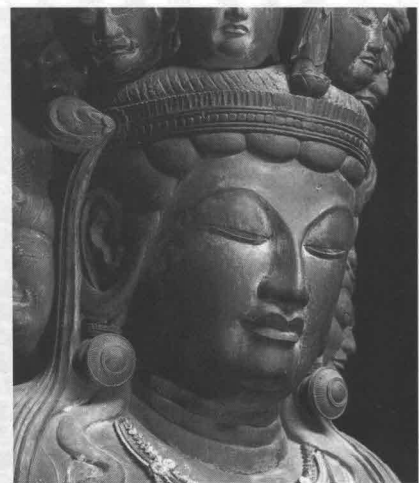


図17 彼岸寺・十一面観音頭部

4 献納像の周辺——総持寺の立場——

ここではまず総持寺がなぜ久邇宮家に観音像を献納したのかを考えてみたい。なぜなら当時東宮成婚記念の献納は多く行われたがそれらは一般的には東宮に対する献納であり、久邇宮家に対する献納は特別な理由が考えられるからである。

久邇宮家は伏見宮邦家親王の第四子朝彦親王に始まる宮家である。朝彦親王は幕末・維新期の政治家。はじめ奈良一乗院門跡、京都青蓮院門跡となつたがのち孝明天皇の信任を受け還俗して文久三年（一八六三）に親王家を新立して中川宮（翌元治元年（一八六四）賀陽宮と改称）となり、公武合体派の重鎮として国事にあたつたが、孝明天皇没後政治生命が衰え明治元年（一八六八）に親王の宣旨を奪われ宮家は断絶した。その後明治八年（一八七五）に久邇宮の新宮号を賜つたものである。朝彦親王のあとには邦彦王が継ぎ、第三代は朝融王が継いだ。昭和二十二年（一九四七）皇籍を離脱した。良子女王は邦彦王の第一皇女である（註8）。

この久邇宮家は総持寺と親しかったらしく、大正十四（一九二五）年六月発行の『宗報』六七八（註9）には「久邇宮殿下御参詣 曩（サキ）ニ大雄殿ニ鎮護国家ノ扁額ヲ賜ヒ、当本山ニ最モ御信仰篤キ 久邇宮殿下同妃殿下ニ、十四日（略）放光殿へ御案内七百ノ僧衆参列特ニ後醍醐天皇ノ御法会ヲ厳修ス」とあり、久邇宮邦彦王が大雄殿に扁額を奉納したこと、総持寺は久邇宮邦彦王に対して「当本山ニ最モ御信仰篤キ」と評していたこと、久邇宮を主賓に七百人の僧で後醍醐天皇の法要を行ったことをいう。これらは総持寺における久邇宮家の重要性を示しているといつてよいであろう。さらに同報には「十七日午後、久邇大将宮殿下ノ御姉君御ニ方御参拝アリ特ニ故朝彦王ノ御尊靈及故東園基愛子爵故竹内惟忠子爵ノ為ニ御冥福ヲ祈ラセラル、乃チ紫雲臺祝下一山ノ清衆随喜ノ諸寺院数百名ヲ率ヒ放光堂ニ於テ法供養ヲ厳修セラル」とあり、朝彦親王の法要を行っているがその時にも数百人の僧による供養であり、やはり総持寺における久邇宮家の重要性は認められるであろう。

このような久邇宮家との関係のなかで大正十一年（一九二二）には日付は不

明なもの良子女王本人も総持寺に参詣している（註10）。この年六月二十日には東宮と良子女王の婚約が正式に決定しているので、あるいはそれに関連するものかも知れない。というのもこの婚約は久邇宮家にとっては難局を乗り越えるの成果であつたからである。

大正八年（一九一九）宮内省から久邇宮良子の東宮妃内定が発表されたが、良子の母方の薩摩・島津家に色覚異常のあることがわかり、元老の山県有朋が反対した。山県は松方正義、西園寺公望とともに久邇宮からの婚約辞退を働きかけ、また首相の原敬もそれを支持したが、国粋主義グループが長州閥である山県が薩摩系の良子が将来皇后になることを嫌つて画策したものとして反対運動を起し、大正十年（一九二二）には怪文書が政治家らに配られた。その結果山県らへの批判が高まり、かつ治安上の不安もあり、同年二月山県系官僚であつた宮内大臣中村雄次郎が辞任し、代わりに薩摩の大久保利通の次男の牧野伸頭が内大臣につくことになつた。その後東宮は半年間渡欧し問題は先送りされたが、十一月四日に首相原敬が東京駅で暗殺され、翌十一年二月一日に山県も失意のうちに没する。そして六月二十日に牧野宮内大臣の主導により摂政となつた東宮の勅許により婚約が正式に決定した、という経緯があつた（註11）。すなわち婚約の発表から決定までは大正八年から十一年までかかり、かつ陰謀説の流布するなかでの当事者であつただけに久邇宮家の苦悩は大きかつたであろう。「信仰篤い」総持寺に参詣する理由になるのではなからうか。一方、総持寺からすれば自寺に篤信の久邇宮家から将来の皇后が出ることはまさに望むところであつたことであろうし、陰謀説の流布するなかでの成功は一層喜びも大きかつたであろう。婚約記念の献納を考えたことは肯けることである。

ところでその献納品がなぜ観音像なのであろうか。その理由と考えられるものが瑩山紹瑾の「観音堂之記」にある。もとは元亨元年（一三二二）に瑩山紹瑾が能登に総持寺を開いた時に記したものであるが、それを先の大正十二年（一九二二）三月発行の『禅の生活』三月号の「観音大士」号（註12）に読み下し文にして「太祖大師御真筆観音堂之記」として掲載してある。それには能登総持寺はもと観音堂で、瑩山紹瑾の夢に現れた観音菩薩により禅院としたこと（したがって総持寺の本尊は観音菩薩である）、その門上に放光菩薩が安

置してあることをいう。放光菩薩とは観音と地藏の二菩薩一対のもので、もとは唐・広善寺の門上に置かれていたといい、「当帝后妣の妊孕のとき參詣祈念するに、放光頻に新にして産生平安、王子誕生せりと、それより以後数百年、大唐日本の皇后将相悉く皆これに帰して帰請すれば産生平安なりき。」というものであるという。すなわち能登総持寺の山門上には観音、地藏があり、これに祈れば皇后ならば王子が誕生し、出産も平安であるという由緒があるという。つまり総持寺の観音菩薩像は王子誕生の靈驗仏であるというのである。この由緒を久邇宮家に当てはめれば将来は皇后となる良子が皇太子を生むことということになる。これが献納品観音菩薩像の目的であろう。総持寺では自宗の信仰由緒に基づく像種の決定ということができるのであり、またそれは久邇宮家にとつても期待されることであつたに違いない。

5 献納像の周辺2—新海竹太郎の立場—

一方、作者である新海竹太郎にとつては献納像はどのような意味を持つていたのであろうか。ついでそれを考えてみたい。

東宮の成婚記念として多くの美術品が献納されている。その多くは献納された東宮、後の昭和天皇の所持品となり、現在は『宮内庁三の丸尚蔵館』の所蔵品となっている。それらは例えば京都市から献上画の制作依頼をうけた富岡鉄斎は大正十二年（一九二三）紙本着色「武陵桃源・瀛洲神境」双幅を描いたが、それは「中国に伝わるふたつの理想郷の情景を双幅に描き配した作」であるという。その意図は将来の天皇の治世に理想の国家を期待したものと見える。また昭和三年（一九二八）の絹本着色「現代風俗絵巻」一卷（十二図）は松岡映丘を筆頭に新興大和絵運動に集まった十二人の画家たちによる合作画卷であるが、奉祝品の「鳳凰菊時絵螺鈿飾棚」の棚飾品として制作されたものである。それぞれの場面は「政治、軍事、教育、農業、商業、工業、水産、宗教と美術、音楽、演劇、交通、スポーツ」という国家の重要事や文化各分野の寓意図として構想されて」とされることが、それも新しい治世の風俗の期待像といえるであ

らう。さらに大正十三年（一九二四）の絹本着色「瑞彩」三帖（七十三図）は東京府が成婚奉祝品として制作したもので、速水御舟、上村松園、川端龍子など全国から選出された当時の日本画壇の代表的画家七十三人によるものであるが、「吉祥の画題や祝意を込めたモチーフをとりあげたものが大部分を占めている」という。つまりは祝意の画である（註13）。このように東宮成婚記念の献上美術品は祝意や新治世に対する期待といった、作者の心情が込められたものであつたということが出来る。それは献納品を制作する美術家一般の意図であつたであろうし、新海竹太郎にとつてもそうであつたに違いない。

実際に新海竹太郎も東宮成婚記念の奉祝品を制作している。大正十三年（一九二四）の木彫「鐘ノ歌」（図19）がそれで、貴族院議員有志による献上品である（註14）。この像は鋳物師が坩堝を大鋏で引き上げる様子を表わしたもので、新海竹太郎の一連の「浮世彫刻」という日常社会に見られる人間の営みを表わした作品の中に位置づけられるものである。「浮世彫刻」については新海竹太郎の自然主義的思想によるもので、そこから竹太郎は人間主義、社会性の観点に立つ作品を生み出したものという見解がある（註15）。「鐘ノ歌」も肉体労働にいそしむ男の姿であり、そこに社会性あるいは人間賛歌を見出すこと



図19 新海竹太郎「鐘ノ歌」

も可能な作品であるが、台座正面にドイツの文学者シラーの詩「鐘の歌」の一節を原文で掘り込んであり、そこから竹太郎がこの作品に込めた意味を見出せるといわれている。すなわちそこには「たしかに、堅いものと柔らかいものが強いものと弱いものが、しつくりとよく混ざり合えば／そこに必ず一つの美しい響きがうまれてくる」とあり、「自由と平等」のもとに人々が「和解」することを願う作品」であるとされる(註16)。これはやはり新時代に対する期待と祝意を表わしていると考えられ、この「鐘ノ歌」も一連の東宮成婚記念の美術品とその制作意図は同様であるといえるであろう。

他方、久邇宮家への献納像の意図はどうか。その像は前述のとおり、総持寺大観音像と同形態のもので、その形態は薬師寺聖観音像を基本的なモデルとしたものであった。つまり久邇宮献納像はモデルがある像であり、創作である「鐘ノ歌」とは異なり、自己の思想に基づく造形ではない。そこに意図、心情を込めるとすればそれはそのモデルとした原形に意味があるのではなからうか。そこで薬師寺聖観音像についての研究史を振り返ってみると(註17)、竹太郎の親友であった平子鐸嶺の説が浮かび上がってくる。

まず、平子鐸嶺について。平子(一八七七一―一九二一)は三重県の生まれの美術史学者で法隆寺論争における非再建論者として著名である。明治二十六年東京美術学校日本画科に入学、三十年卒業とともに同校西洋画科に再入学、三十四年卒業。のちに哲学館(現東洋大学)で仏典・漢籍・梵文を学ぶ。三十六年東京帝室博物館嘱託となり内務省嘱託を兼務、四十三年古社寺保存会委員となったが、四十四年肺患のため没。三十五歳(註18)。この平子と竹太郎は親友であり、かつ平子は竹太郎の古美術の興味を育て、その知識、情報の源であったという。例えば明治四十一年の竹太郎の作品「羅漢」(図20)のコブラを連ねたようなデザインは平子の葉書にあるデザイン(図21)の影響を思わせるし、大正元年の作品「左丘明」(図22)に関して明治四十四年の平子の葉書に「左丘明は一寸まっすぐれ玉え」とあり、竹太郎が制作に際し平子に左丘明に関する質問をしていたことを窺わせるという。さらに平子の死後、その遺稿類を竹太郎がまとめて預かったという(註19)。そのような平子の論考のなかに薬師寺聖観音像についての考察がある。

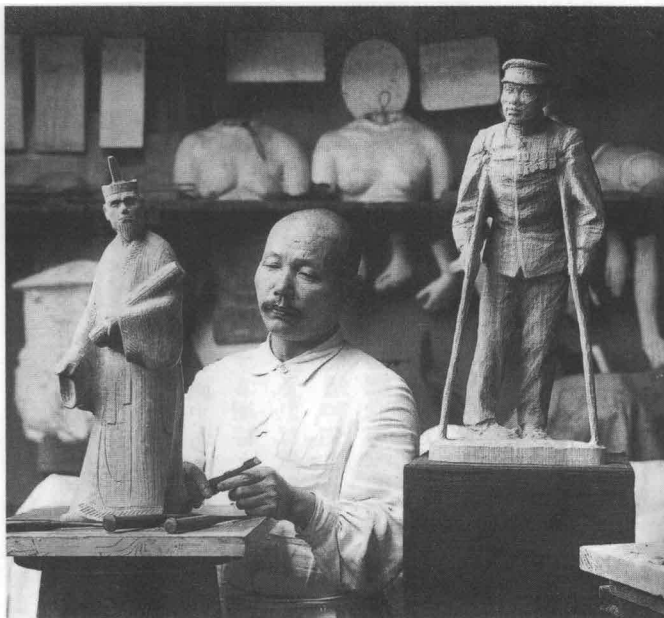


図22 新海竹太郎と「左丘明」、「戦捷記念日」

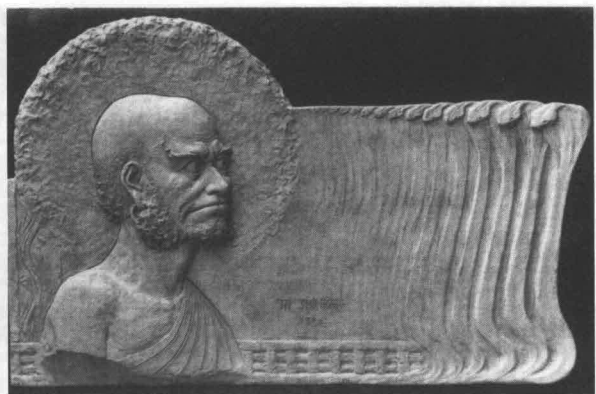


図20 新海竹太郎「羅漢」



図21 平子鐸嶺年頭葉書「コブラと貝葉」

平子は論文「法隆寺壁画の年代を論ず」（註20）のなかで薬師寺聖観音像に言及し、長和四年（一〇一五）の『薬師寺縁起』の金堂の条にあげられている二体の観音像のうちの一体の「奉為難波那我良豊前宮治天下天皇孝徳天王也、皇后御願也」とあるものを薬師寺聖観音像であるとみなした（註21）。つまり平子によれば薬師寺聖観音像は孝徳天皇の為に間人（はしひと）皇后が発願した像ということになり、間人皇后の没年である天智四年（六六五）以前の制作で、薬師寺創建以前のものであり、後世、薬師寺に移されたものであるという年代論につながっていく。このうち聖観音像については研究史的には様式論から諸説が唱えられるようになるが、少なくとも明治、大正期にその由緒、由来にかんするものはこの平子説が最新のものであり、したがって竹太郎の薬師寺聖観音像に関する認識は平子の説のものであったであろう。ということは竹太郎は薬師寺聖観音像は皇后が天皇の為に発願した像と思っていたわけであり（ましてや親友の唱えた説である）、将来、皇后になる東宮妃の久邇宮良子の念持仏としてはふさわしいと考えたのではなからうか。すなわち、竹太郎にとって献納像はそのモデルの由緒ゆえにその形態でよしとしたのであろう。東宮への献納像「鐘ノ歌」の造形は竹太郎独自の思想によるものとはいえ、その制作意図は他の作家の制作意図と同レベルのいわば「公的」なものであったが、良子への献納像の造形は平子鐸嶺の研究あつてのもの、いわば「私的な関係」の中から生み出されたものであつて、いふことが出来るのではなからうか。

結 語

以上、山形美術館の新海竹太郎作聖観音像の制作背景について考えてきた。その原像である久邇宮良子に対する献納像は皇太子の誕生によって自寺の安泰、発展を期待した総持寺の思惑と親友平子鐸嶺の学説を信頼する竹太郎の考えが一致したものと思われた。またさらに原形である総持寺大観音像の存在を指摘できたことも今後の竹太郎研究に益するのではなからうか。繰り返しになるが、新海竹太郎にとって「大観音像」は仏教彫刻として「理想の観音像」を

求めた結果、薬師寺聖観音像を基とした形態となつたものであり、「献納像」は東宮妃久邇宮良子という個人に対する献納像ゆえに同じく薬師寺聖観音像を基とした像となつたということである。

註

- 1 法量 総高35・8cm、像高30・3cm、髮際高26・5cm、頂一顎5・8cm、面長3・0cm、面奥3・3cm、面幅2・7cm、耳張3・3cm、胸厚（右）4・1cm、腹奥4・8cm、肘張9・5cm、天衣張（最大）10・7cm、足先開（外）5・1cm、台座 蓮肉径（前後）6・5cm、蓮弁径（前後）7・6cm、高6・0cm、
- 2 平成十八年八月十二日、山形美術館学芸員我妻寿彦氏とともに確認した。
- 3 『鶴見ヶ丘』（昭和四九年 蜃山禅師奉賛刊行会）p.212〜3。この文書は戦時中の金属供出のための調査に対する寺側の回答書である。しかし結局、大観音像は供出されてしまった。
- 4 『禅の生活』三月号（大正十二年 編集兼発行人 新井石禅 発行所 青山書院）「観音大士号」
- 5 田中修二「彫刻家・新海竹太郎論」（二〇〇二 東北出版企画）
- 6 新海竹蔵「新海竹太郎伝」p.83。（昭和五十六年 非売品）
- 7 『宗報』六七四（大正十二年二月一日 曹洞宗務院）
- 8 『国史大辞典』（吉川弘文館）「朝彦親王」、「久邇宮家」
- 9 『宗報』六七八（大正十四年六月一日 曹洞宗務院）
- 10 註3「鶴見ヶ丘」口絵写真
- 11 『岩波 天皇・皇室辞典』「宮中某重大事件」（二〇〇五年 岩波書店）
- 12 註4
- 13 以上の作品については『新版 雅・美・巧 所蔵名品300選（宮内庁三の丸尚蔵館名品図録）』（平成十五年 宮内庁三の丸尚蔵館）による。
- 14 『近代日本の置物と彫刻と人形と—豊穰なる立体像の世界』30新海竹太郎《鐘ノ歌》解説（平成十六年 宮内庁三の丸尚蔵館）
- 15 田中修二「彫刻家・新海竹太郎論」（二〇〇二 東北出版企画）
- 16 田中修二「彫刻家・新海竹太郎論」（二〇〇二 東北出版企画）p.393〜8。
- 17 齋藤理恵子「東院堂聖観音像」（薬師寺 千三百年の精華—美術史研究の歩み—）第三章 平成十二年 里文出版）
- 18 『吉川弘文館 国史大辞典』「平子鐸嶺」項
- 19 田中修二「彫刻家・新海竹太郎論」（二〇〇二 東北出版企画）
- 20 平子鐸嶺「法隆寺壁画の年代を論ず」（『仏教芸術の研究』金港堂書籍 大正三年）
- 21 この記事はあくまで金堂の条にある記事で、聖観音像は現在は東院堂にあるので、その

関係は全く不明といわざるを得ない。註17齋藤論文参照。

〔付記〕本稿は二〇〇六年十一月十八日、山形美術館で行った山形大学付属博物館公開講座での講演を基にしたものである。駒沢大学禅文化歴史博物館 皆川義孝氏に諸資料をご教授いただきました。記して謝意を表します。

執筆者

長坂 一郎 芸術学部 美術史・文化財保存修復学科

NAGASAKA Ichiro School of Art/Department of Art History and Conservation

准教授

Associate Professor

A production aim of standing statue of Shohkan'on by Taketaro Shinkai

NAGASAKA Ichiro

「As for Yamagata Museum's" standing statue of Shohkannon(35.8cm)", Chuta Itoh reproduced the image which Taketaro Shinkai's work produced by a request of Tsurumi-Sohjiji Temple as an offering when Kuninomiya Yoshiko married to be a Princess in 1924(Taisho 13), in the next year. The image derives from the Shohkannnon of Toh-indo Yakushiji Temple, Shinkai just did the similar image of "The Great Shokannon Bosatsu statue" less than 50m for the honoring of the Emperor Meiji in Sohjiji Temple for the same period. Even if both images are similar at their appearances, each purpose is different. On the offering image, "The Shohkannnon of Yakushiji Temple" was conformed to the theory of art historian Takurei Hirako, an intimate friend, to be the image which the Empress made the request for the Emperor, and "The Great Shohkannon Bosatsu" reached the molding as an example of the study of the classic sculptures. The expectations both Sohjiji Temple and Taketaro Shinkai would be mixed in there. 」